四條畷市文化財調査報告　第 47 集

飯盛山城跡測量調査報告書

―ＶＲＳ-ＧＰＳ測量による縄張図の作成―

平成２５（２０１３）年３月

四條畷市教育委員会

例　　言

１．本書は、平成 24（2012）年１月に実施した飯盛山城跡の縄張図作成のための測量調査報告書であり、四條畷市文化財調査報告の第 47 集である。

２．調査は、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。

３．調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主幹（現四條畷市立歴史民俗資料館 館長） 野島 稔が担当した。（肩書は当時）

４．現地での調査及び縄張図作成にあたっては滋賀県立大学 人間文化学部 地域文化学科 准教授 中井 均 氏の指導のもと、株式会社アコードに委託し実施した。

５．本書は、四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始・事務職員 實盛良彦が、分担して執筆・編集を行った。文責者については、それぞれの文末に記載している。

６．調査報告として、中井氏から玉稿を賜った。

７．調査の成果品である図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

１．本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）であり、座標値は世界測地系を用いた。

２．「くるわ」の表記については、「郭」と「曲輪」の二種が存在する。いずれも誤りではないが、本書では『四條畷市史』第一巻での山口博氏の記述に従い、基本的に「郭」を用いる。

３．城の名称に関しては、文献資料では「飯盛城」と記されているが、本書の中では周知の埋蔵文化財包蔵地として登録している「飯盛山城跡」を使用する。

本　文　目　次

例言・凡例・目次・・・

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讃良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。飯盛山城跡は、この山系上に位置する遺跡である。

飯盛山城跡は、四條畷市大字南野に所在する中世の城館跡である（第１図）。城跡は南隣の大東市にも広がっており、大東市では飯盛山城遺跡として周知遺跡に登録されている。これまでに四條畷市域で飯盛山城跡の発掘調査は行っていないが、近隣地で高圧電線鉄塔の建設に伴い発掘調査を行い、狼煙場の可能性がある砦跡を検出している。

飯盛山城跡は、古くは 1964 年に府立四條畷高校地歴クラブにより踏査が行われていて、この結果をもとに山口博氏はその構造について何度か触れている（山口 1968、1972）。その後、縄張図が中井均氏によって作成され、公開された（中井 1981）。近年になって中井氏によりさらに縄張図の修正が行われ、公表されている（中井 2012、2013 等）。

（實盛良彦）

１．飯盛山城跡　　２．飯盛山城砦跡

第１図　遺跡位置図

第２章　飯盛山城の概要

飯盛山城の初見は、『太平記』巻 26 の正平３年(1348)四条縄手合戦の記事中に「飯盛城」として記されている。そこには「南朝方の恩地左近太郎が飯盛城に立てこもり、細川頼之軍に対し防御した」などと記されているが、この城については、古戦場としての臨時的な砦のようなものとして考えられている。

このような戦時体制下の城（砦）から半永久的居城としての飯盛山城を築いたのは、河内守護畠山義堯の守護代木沢長政が城主になってからと考えられている。

木沢長政が主君の畠山義堯を裏切り細川晴元に寝返ったため、享禄５年（1532)、畠山義堯は飯盛山城を攻めるが、細川晴元や本願寺勢によって敗死する。これらの防戦で勝利を得た木沢長政は、細川晴元をこえて将軍家直属の家臣となり勢力をのばしていく。そこで細川晴元は三好長慶と結んで、天文 11 年（1542）の河内太平寺の戦いで木沢長政を破り、長政は敗死する。

木沢氏滅亡後、河内守護畠山高政の家臣である安見直政が入城するが、自ら河内守護代となり主君の畠山高政を紀伊に追放する。そこで永禄２年（1559)、三好長慶は畠山高政を援護し安見直政を大和へ敗走させるが、三好長慶が河内に進出してくる事を恐れた畠山高政は、安見直政に与して再び河内守護代とし飯盛山城に配置する。その処遇に憤慨した三好長慶は、畠山高政が居城する高屋城（羽曳野市）を包囲し、安見直政軍を堀溝（寝屋川市）で破り、両者は堺へ敗走する。これらの勝利から三好長慶は、畠山氏の本拠地である河内を奪って畿内支配をはかろうとし、永禄３年（1560）11 月 13 日、芥川山城（高槻市）から飯盛山城へ移った。永禄５年（1562)、飯盛山城は畠山高政軍に攻撃されるが、それを打ち破る。こうして三好長慶は、飯盛山城を居城として大規模改修し、河内・大和・山城・摂津・丹波・播磨・阿波・伊予・淡路・讃岐を支配する戦国大名となった。永禄７年（1564)、三好長慶は飯盛山城内において 43 歳で病死する。その喪は２年間伏せられ、二ノ丸御体塚郭に仮埋葬されたと伝わっている。その後、三好家の三人衆が三好義継を補佐するが、三好家家臣の松永久秀と意見が合わず戦を繰り広げていくなか、三好義継は若江城（東大阪市）に移り、高屋城主畠山昭高の家臣遊佐信教が入城する。そして永禄 11 年（1568）に織田信長が入洛し、摂河を平定していく中で、天正４年（1576）信長軍に攻められ落城し廃城となった。

なお、永禄６年（1563）に三好長慶は、飯盛山城下でのキリスト教の布教を宣教師に許可し、永禄７年（1564）飯盛山城内において、三好家家臣の 73 名が洗礼を受ける。その中には、飯盛山城の支城であった三箇城主三ケサンチョや岡山の結城弥平次ジョルジなどがいた。これが、この後河内キリシタンが繁栄していく契機となった。

（村上　始）

第３章　調査に至る経過

四條畷市と大東市に跨る飯盛山の山頂部分を中心として存在する飯盛山城については、『四條畷市史』と『大東市史』で紹介されており、城の構造についての説明や昭和 39 年の四條畷高等学校地歴部の調査を基に作成した構造図が掲載されている。その後、『日本城郭体系』など城郭研究者の現地調査による縄張図が発表されている。これらは歩測によって作成されたものではあるが、城の構造を熟知した研究者によるものであるため、その図面の精度は高いものであり、また近年では距離計も併用されるようになり、より精度の高い図面が作成されている。しかし、これまでの測量調査では各郭の位置の国土座標値が計測されていないことから、既存の地図に正確な位置を示したものとはなっていなかった。

近年、中世城郭研究が進められるようになるなか飯盛山城跡は、戦国時代末期に河内・大和・山城・摂津・丹波・播磨・阿波・伊予・淡路・讃岐を支配した戦国大名三好長慶の居城として、その規模や石垣など遺構の良好な残存状況から注目されるようになる。今後、飯盛山城の保存や活用を検討していくにあたり、その基本となるより正確な縄張図が必要となることから、今回の測量調査を実施することとなった。この調査に関しては、大東市教育委員会も同時に実施していることから、最終的には

両市の図面が揃うことで飯盛山城跡の全体図が完成することとなる。

今回の調査を実施するにあたっては、滋賀県立大学 人間文化部 地域文化学科 准教授 中井 均氏に調査指導を依頼し、中井氏が作成した既存の縄張図を基にして郭の位置を測量し、四條畷市都市計画図（1/2500）に入れ込んだものを作成した。また現地踏査も並行して行い、石垣や郭の位置の再確認も実施した。

現地調査は、平成 24 年（2012）１月５・６・11・12・13 日に実施し、図面作成作業を平成 24 年３月 31 日まで行った。

（村上）

第４章　調査の方法

今回、飯盛山城跡の縄張図を作成するにあたっては、山城という遺跡の性格上、測量するにあたっては従来のトータルステーションなどの測量方法は樹木などの障害物が多いことなどから適しておらず、また従前のものより精度が高い縄張図の作成を目指したことから、ＧＰＳ衛星からの電波を利用して各郭の位置を観測する方法を採用した。

今回採用したＧＰＳ測量の中でも最新の「ＶＲＳ－ＧＰＳ測量技術」は、「仮想基準点方式」と呼ばれ、国土地理院の電子基準点の観測データを利用するもので、ＧＰＳ受信機１台でリアルタイムにデータを受信して観測でき、観測精度も誤差２～３㎝と高精度のものである。

電子基準点の位置情報と衛星からの情報について携帯電話回線を通じて「計算センター」で解析し、観測位置の座標値を求めるものである。携帯電話の電波が通じて、アンテナの上空に衛星の電波が受信できる空間があれば、一人でも観測可能であり、観測時間も数分で済むものである。

しかし、今回の調査では調査開始後に携帯電話の電波の受信状況が予想外に悪い場所や上空の状況が良好でない場所が判明したことから、そのような場所に関しては、受信状況の良好な箇所で基準点を設け、その地点からトータルステーションを用いて各郭の位置を観測した。

今回この測量を行うことにより、従来からの問題点であった城郭研究者によって作成された郭の位置をより正確に都市計画図(1/2,500)に合成することができたことは、今後縄張図を活用していく中で大きな成果である。

（村上）

第５章　調査の成果

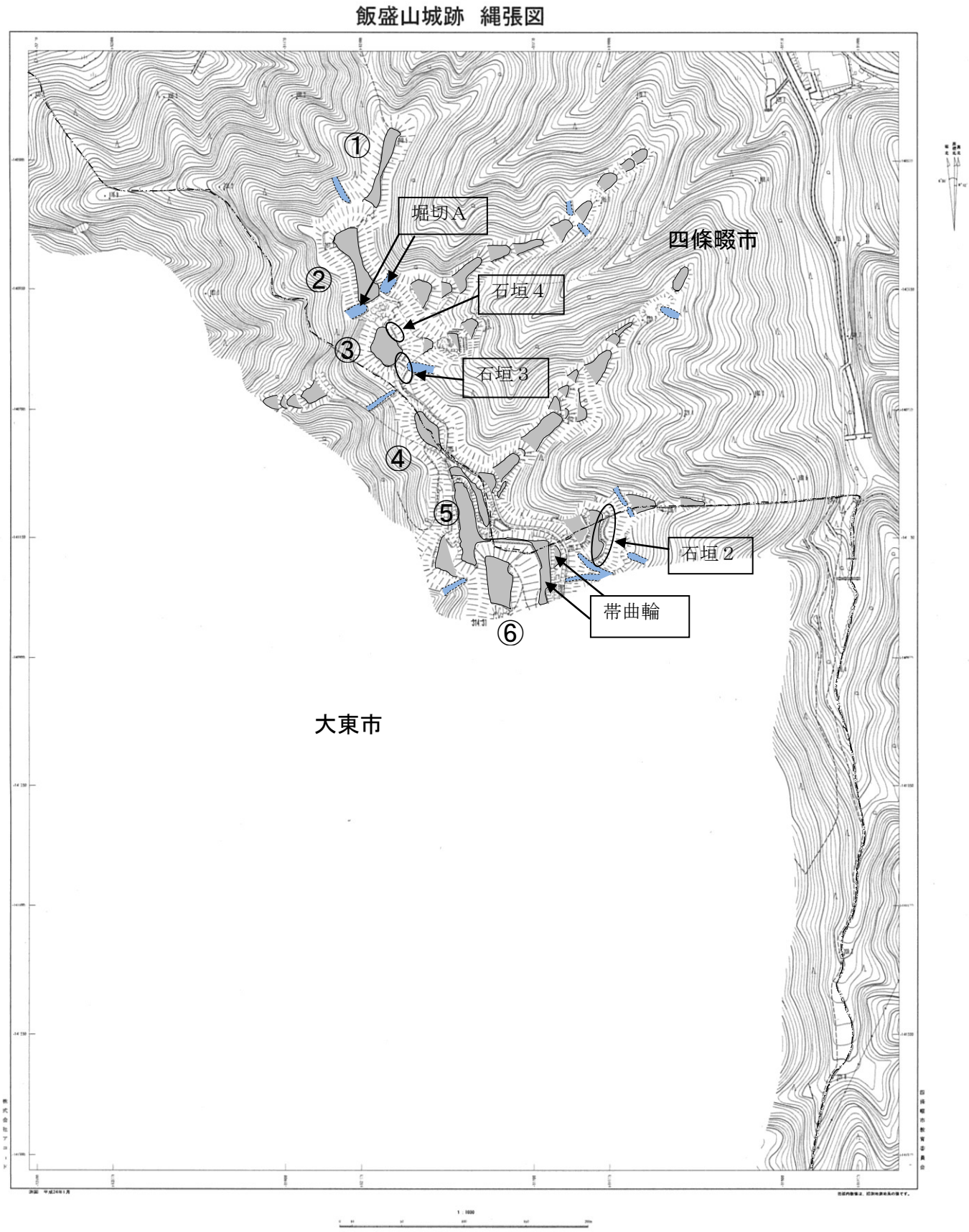
今回の測量調査と現地踏査を実施したことで、これまで懸案であった四條畷市都市計画図（1/2500）に既存の縄張図を正確に入れ込むことができた。（第２図）

図中の一点破線が、現在の四條畷市と大東市との境界を示しており、飯盛山城の城域は南側の空白部分（大東市）に大きく広がっている。

また、『四條畷市史』や『大東市史』のなかで最北端の郭とされている「二ノ丸北出郭」に関しては、今回の調査によって地形などを詳細に検討したところ、自然地形であり郭と認定することは困難であるとの報告を受けていることから削除することとした。

第１表にまとめたものは、前述した『四條畷市史』と『大東市史』に紹介されている飯盛山城跡の各郭の呼称名である。それぞれ異なっている記載がされていることから、それらを整理しておくこととし、中井氏の本文中で使用されている呼称についても併記しておく。これらの名称については、大東市や城郭研究者とも協議して、統一していくことも考えておく必要があると思われる。

（村上）



第２図　飯盛山城跡縄張図（四條畷市域）

第１表　飯盛山城跡の郭名称対照表

第２図	四條畷市史	大東市史	中井氏本文
―	二ノ丸北出郭	（北の丸）北の丸二の出郭	―
①	二ノ丸北郭	（北の丸）北の丸一の出郭	Ⅶ郭
②	二ノ丸史蹟碑郭	（北の丸）北の丸郭	Ⅵ郭
③	二ノ丸御体塚郭	（北の丸）御体塚郭	Ⅴ郭（御体塚郭）
④	本丸三本松郭	（一の丸）三本松郭	Ⅳ郭
―	―	（一の丸）穴口出郭	―
⑤	本丸倉屋敷郭	（一の丸）穴口郭	Ⅲ郭
⑥	本丸展望台郭	（一の丸）展望台郭	Ⅱ郭（本郭）
	本丸高櫓郭	（一の丸）高櫓郭	Ⅰ郭（高櫓郭）（主郭）
	―	（本丸）北出郭	
	本丸千畳敷郭	（本丸）北郭	Ⅷ郭（千畳敷郭）
		（本丸）中郭	
		（本丸）千畳敷郭	
	千畳敷の広大な平地の尽きる南端に土塁を１ｍの高さに盛った櫓跡	（本丸）千畳敷出郭	南丸
	―	（南の出丸）ヨボシト砦	―
		（南の出丸）最南端砦１	―
		（南の出丸）最南端砦２	―
	馬場	馬場（郭）	馬場

第６章　まとめ

今回の測量調査によって既存の縄張図を都市計画図に取り込めたことで、より正確な飯盛山城の位置関係を示すことができ、また踏査調査により郭や堀切、石垣が良好な状態で残っていることを再確認できた。（写真１）今回の調査は大東市でも実施されていることから、飯盛山城跡の全体図が完成したことになる。このことは、今後に飯盛山城跡の調査を進めていくうえでの基本資料を作成できた大きな成果である。

最後になるが、今回の調査を指導していただいた滋賀県立大学 人間文化学部 地域文化学科 准教授 中井　均氏からいただいた原稿を第７章に掲載する。中井氏は今回の調査で大東市側の指導も行われたことから、本文は飯盛山城跡全体の内容となっている。ただし、この『飯盛山城跡測量調査報告書』は四條畷市域のものであるので、第２図中には本文中で述べられている大東市側の位置は記載していない。この箇所については、大東市教育委員会の報告書を参照されたい。

今後、飯盛山城跡の調査・保存・活用に関しては、この城が四條畷市と大東市に跨って存在していることから、両市で共同して実施していきたい。

（村上）

第７章　飯盛山城跡の構造

滋賀県立大学 人間文化学部 地域文化学科 准教授　中井　均

大阪府下には約四五六ヶ所にのぼる中世城館跡が分布している(『日本城郭大系』一二巻 新人物往来社 一九八一年)。それらの大半は江戸時代以降の開発によってほとんどその遺構を残していない。こうした大阪府において三好長慶の築いた芥川山城跡(高槻市)と飯盛山城跡(大東市・四條畷市)はいずれも大規模な中世山城跡であり、残存状況も良好である。

今般、四條畷市教育委員会から委託を受け、この飯盛山城跡の簡易測量を実施した。城跡の測量は城郭研究者による歩測によって作成される縄張り図と呼ばれる図面が活用されている。もちろん城跡の構造を読み込み、その図面の精度は非常に高い。近年では距離計も併用され、より精度の高い図面が作成されている。しかし、問題点としては、曲輪の位置を現在作成されている都市計画図(1/2,500)にどう挿入するかという点がある。そこで曲輪の端部の位置を GPS によって正確に落とし込むことによって、この問題を解消することとした。今回の測量調査は(株)アコードとの共同作業によって歩測と GPS とを併用して実施したものである。使用した GPS は GPS 測量のなかでも最新の VRS-GPS 測量技術で、誤差 2～3cm の高精度のものである。

現地での調査は、平成 24 年 1 月 5,6,11,12,13 の 5 日間とし、その後、図面の作成を室内で実施した。

飯盛山城跡は河内平野の東辺に横たわる生駒山系の北端部に位置している。城跡の最高所は標高三一五ｍを測る。城の規模は南北約六五〇ｍ、東西約四〇〇ｍを測る大規模な城跡である。その特徴は非常な痩尾根を利用した山城といえよう。主郭Ⅰからは河内平野をほぼ一望することができる。飯盛山城以前の長慶の居城である芥川山城は北摂に築かれた山城であるが、ここからは摂津、河内を一望することができる。

こうした一国レベルが眺望できる山に築かれた山城は単に比高が高いという軍事的要衝というだけではなく、山城から眺望できる地域を支配する戦国大名クラスの居城にふさわしい山であるといえよう。

ここでは飯盛山城跡の構造について検討するものであるが、その前に飯盛山城の歴史について簡単に触れておきたい。三好長慶は永禄三年(一五六〇)に畠山高政、安見直政を攻め、飯盛山城に入城する。それまで居城としていた芥川山城を息子義継に任せ、高屋城とともに河内支配の拠点とした。飯盛山城はおそらく長慶の居城段階に大改修され、城郭としての機能を高めたものと考えられる。

永禄七年(一五六四)に長慶が没し、一一年(一五六八)に織田信長が入洛すると、三好義継は若江城に移り、飯盛山城には畠山昭高の家臣遊佐信教が入城する。しかし天正四年(一五七六)には信長に攻められ落城し、以後廃城となった。

こうした歴史から現存する飯盛山城跡の遺構は永禄三～七年の長慶時代、永禄七～一一年の義継時代、元亀年間(一五七〇～七三)～天正四年の遊佐信教時代のいずれかのものと考えられよう。

さて、現存する城郭構造であるが、標高三一五ｍの山頂に高櫓郭と呼ばれる小曲輪Ⅰが主郭に相当する。この高櫓郭Ⅰより北方に本郭と呼ばれるⅡ郭、さらにⅢ郭、Ⅳ郭が階段状に配されている。これらが飯盛山城の中心部分であるが、これらの曲輪から東西方向に尾根筋がいくつも派生している。そのなかでⅢ郭の西側に伸びる尾根上には大小八段からなる曲輪群を設けている。またⅡ郭の東側には二段にわたる帯曲輪と、さらにその東側に派生する尾根上に二段の曲輪を設けその先端には堀切が構えられている。Ⅲ郭の東側に派生する尾根上にも大小八段からなる曲輪群が設けられ、その先端には堀切が構えられている。

Ⅳ郭の北側は鞍部となり、その北側、標高二八七ｍのピークに一段と高く、御体塚郭と呼ばれるⅤ郭があり、さらに北方のⅥ郭へと続く。御体塚郭ⅤとⅥ郭の間には堀切Ａが設けられている。Ⅵ郭の北側にはⅦ郭が構えられているが、その最前線には堀切もなく、そのまま北方へ尾根が下がっていくというやや中途半端な構造となっている。またⅢ郭とⅣ郭の間は本来堀切が必要な場所であるが、自然の鞍部のままとしており、地表面からは人工的な加工は施されていない。

御体塚郭ⅤとⅥ郭は独立した形態となり、西側の尾根には五～六段の小曲輪を、東側では北方の尾根筋に五段の曲輪群を、南方の尾根筋には三段の曲輪群をそれぞれ配置している。なお、この東側北

方の曲輪群の先端には四条の堀切が構えられている。

再び高櫓郭Ⅰに戻り、今度は南方を概観してみたい。高櫓郭Ⅰのすぐ南側には尾根を切断する堀切Ｂが設けられているが、この堀切Ｂは東西両斜面に向かって竪堀としている。堀切Ｂの南方は鞍部となり、その南側に千畳敷郭と呼ばれるⅧ郭が構えられている。なお、この鞍部は現在破壊が著しいが、鞍部の東側に竪堀Ｃが認められることより、元来は鞍部にも堀切が存在していたことを示唆している。

さて、千畳敷Ⅷ郭はＦＭ８０２送信所によって破壊されているが、千畳敷は現在六段の曲輪群から構成されている。その中心となるのが標高三一四・五ｍの地点で、これまでの高櫓郭Ⅰ以北の曲輪群に比べ、広大な面積の曲輪となっている。この千畳敷郭Ⅷも御体塚郭Ⅴ、Ⅵ郭と同様に高櫓郭Ⅰとは深い堀切で切断されていたと考えられ、千畳敷郭の曲輪群のみで独立性が高い。千畳敷郭ⅧはＹ字に構えられており、西側は曲輪直下に堀切Ｄを構えている。一方、東側は上下二段となり、さらに下段は再びＹ字状となり、その西方部分は南丸と呼ばれ、東辺には飯盛山城跡で最も残りの良い土塁が認められる。この土塁は東側直下を通る城道に対して横矢がかかるようになっている。千畳敷Ⅷ郭は広大な面積を有しており、山上部に居住空間の存在した曲輪群と考えられる。

なお、千畳敷Ⅷ郭の南端から城道は南に向かうが、その鞍部は掘り切られておらず、そのまま尾根道に至るという中途半端な構造となっている。これは北端の終わり方と同じで、どうも城域の両端がしっかりと決められていない。芥川山城跡も同じで、東側の帯仕山との間は広大な鞍部とはなっているものの、山を切断するような堀切は設けられていない。

ところで千畳敷Ⅷ郭の先端部、南丸には堀切は設けられないものの、その斜面には畝状空堀群の痕跡らしき遺構が認められる。

千畳敷Ⅷ郭の東側斜面には現在楠公寺が建っているが、ここは通称馬場と呼ばれ、城域の一画であった。

飯盛山城跡の遺構で最も注目されるのは石垣の存在である。現存する石垣は主に高櫓郭Ⅰより北側に集中して認められる。高櫓郭Ⅰの東側直下の城道を保護するように石垣１が、またⅡ郭より東側に派生する尾根上の曲輪群の先端部に石垣２が、さらに御体塚郭ⅤからⅥ郭にかけて石垣３、４が確認されている。

石垣はいずれも人頭大の自然石を五～八段程度積み上げたもので、その特徴として垂直に積み上げることを意識している。簡単な石垣であり、その使用場所も極めて限定されており、石垣出現期の遺構として位置付けできる。石垣については長慶の居城である芥川山城跡にも部分的に用いられており、長慶によって摂津、河内の諸城にいち早く導入されたようである。

飯盛山城跡は摂津の芥川山城跡とともに大阪府を代表する山城跡である。現存する遺構は永禄三年から永禄七年に三好長慶によって築かれたものと考えられる。特に石垣については芥川山城跡との類似より安土城に先行する石垣の城として評価される。三好氏の城が阿波においてはほとんど発達しないことに対して、畿内への進出に伴なって芥川山城、飯盛山城などを築く。その経緯はまさに戦国期の城が戦いによって発達することを如実に示している。

参考文献

櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編 2007『隠された墓碑』第 22 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2010『田原城とその菩提寺』開館 25 周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
中井　均 1981「飯盛山城」『日本城郭体系』第 12 巻大阪・兵庫、新人物往来社。
中井　均 2012「戦国の山城を歩く・飯盛山城」『歴史読本』第 57 巻 9 号、新人物往来社。
中井　均 2013「飯盛山城の構造と歴史的位置」『大阪春秋』第 149 号、新風書房。
平井　聖ほか編 1980『日本城郭体系』第 10 巻三重・奈良・和歌山、新人物往来社。
平井　聖ほか編 1981『日本城郭体系』第 12 巻大阪・兵庫、新人物往来社。
山口　博 1968『四條畷町の歴史』。
山口　博編 1972『四條畷市史』第 1 巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第 4 巻、四條畷市役所。

写真１　石垣４（③ 御体塚郭Ｖの東側）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いいもりやまじろあとそくりょうちょうさほうこくしょ
書　　名	飯盛山城跡測量調査報告書
副 書 名	ＶＲＳ-ＧＰＳ測量による縄張図の作成
シ リ ー ズ 名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第 47 集
編 著 者 名	村上　始・實盛良彦（編集）、村上・實盛・中井　均（執筆）
編 集 機 関	四條畷市教育委員会
所　在　地	〒575-8501　大阪府四條畷市中野本町１番１号
発　行　日	2013(平成 25)年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いいもりやまじろあと 飯盛山城跡	しじょうなわてしおおあざみなみの 四條畷市 大字南野	272299	34° 72′ 86″	135° 65′ 26″	平成 24 年 １月５日～ 13 日	―	保存目的

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯盛山城跡	山城跡	南北朝時代 ～戦国時代	郭（曲輪） 石垣 堀切	―	城域が南北 650m、東西 400ｍであることが判明。 新たな石垣や郭の存在を確認した。

四條畷市文化財調査報告　第 47 集

飯盛山城跡測量調査報告書

―ＶＲＳ-ＧＰＳ測量による縄張図の作成―

編集・発行　四條畷市教育委員会
発行日　　平成 25 年３月 31 日